南方熊楠全集

別巻1

平凡社

南方熊楠全集（全一二巻）
別巻第一　書簡補遺・論考補遺
昭和四九年三月一二日　初版第一刷発行

著　者　南方熊楠
発行者　下中邦彦
発行所　株式会社　平凡社
東京都千代田区四番町四番地
郵便番号　一〇二
電話　（二六五）〇四五一
振替　東京　二九六三九

印刷　東洋印刷株式会社
フォト印刷株式会社
製本　株式会社石津製本所

落丁・乱丁本は小社サービス課にてお取替えします（送料は小社負担）。
© 岡本文枝 1974

凡　例

一、本全集は、南方熊楠が公表した論考、随筆、英文著述、ならびに未公表の論考、手稿類などを集大成することを期した。したがって生前刊行された『南方閑話』『南方随筆』『続南方随筆』の三冊の単行本、および死後刊行された乾元社版『南方熊楠全集』に比し、以下の諸方針により、大幅に増補されている。

1. 国内で、著書として、あるいは雑誌に発表された文章は、内容がはなはだしく重複する一、二の例外を除き、すべて収録する。また新聞に掲載された文章も、主要なものは収録する。
2. 外国の刊行物に発表された英文著述および未公表の英文論考は原文で収録する。その校訂には監修者の一人である岩村忍が当たる。
3. 書簡は、学術的および伝記的に重要な内容をもつものを、入手しうる限り、完全な形で収録する。
4. その他、未公表の論考、手稿類、日記の一部、年譜、著述目録、索引を付載する。
5. 以上の諸資料のほとんどは南方家に所蔵されていたもので、それらの整理には監修者の一人である岡本清造が当たる。

二、表記は原則として「現代かなづかい」に改め、送りがなも（有た→あった　名く→名づく　息ず→息まず　などのように）読解の便をはかって付加し、大部分の接続詞、副詞、助詞なども、漢字をかな書きに改めた。また、カタカナ・漢字混交文は、特殊な植物学論文（横書き）を除き、ひらがな・漢字混交文に改めた。

三、漢字は、当用漢字、同補正案、人名用別表にある字体は、これを使用し、また一部の俗字、同字などで現在常用されないものは、通用のものに改めた（恠→怪　耻→恥　咀→詛　など）。ただ、著者独特の書きぐせである用字、用語は、肉筆手簡、初出雑誌などと校合のうえ、残したものが少なくない（たとえば愛憎（愛想）、居多（許多）などの用語はそのまま残し、臆と憶、希と稀、注と註の混用などはあえて統一しない）。

四、引用文は、著者が内容をとって略述し、あるいは書き改めたと思われる場合を除き、可能な限り原典と照合、校訂した。また漢文の引用文は「読み下し文」に改め、この部分は、一般の「　」に対し小さい「　」で区別した。読み下しには飯倉照平が当たり、監修者の一人である入矢義高が校閲した。

五、外国人名・地名などの固有名詞および若干の普通名詞で、現在常用されない漢字表記は、カタカナに改めた。ただし、初出にルビを付した出典名は漢字表記のままとした。また、これらの出典の訳名および当初からのカタカナ表記は論文によってかなり異同があるが、これらは少数の例外を除いて、同一論文内で統一するにとどめた。なお、ヂ→ジ　ヅ→ズ　などの書き改めは行なった。

六、書名および雑誌名には『　』、論文名には「　」を付し、欧文では、著者が多く用いた方式に従い、書名は ' '、論文名は " " に統一した。なお巻号数、頁数を表わす漢数字は、十方式を用いず一〇方式とした。

七、ルビは、既刊文献にあって著者独特の読みぐせと思われるものは、これを生かし、さらに一般の難読語にも、なるべくルビをつけた。句読点、改行、字下り、小字の扱いなどは、読解の便をはかってあらたに整理した。

八、既刊文献における削除部分、欠字および伏字は、可能な限り復原した。なお、原典の欠字と判明したものは□□、復原不可能の箇所は××で残した。

九、本文中の校注補訂は〔　〕をもって示し、著者の手沢本・手沢雑誌における書き込みを本文中に挿入した場合は、〔著者かきこみ〕と特記した。また、各論文の発表または執筆年月日、掲載雑誌または新聞名、巻号数は、文章の末尾に付記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

した。以上の諸校訂には飯倉照平が当たった。なお、特に必要な場合には、使用したテキストに関し、論文または書簡の末尾に注記を付した。

本書（別巻第一）は、第一巻から第十巻に至る全集本巻に収録できなかった書簡および論考を、書簡補遺・論考（英文を含む）補遺として収録した。

書簡補遺の過半を占めるものは上松蓊宛書簡であるが、その他に、山田栄太郎等三氏宛書簡・雑賀貞次郎等八氏宛書簡・西面欽一郎等十二氏宛書簡（いずれも主として紀州関係の知人宛書簡）および三田村玄竜等五氏宛書簡（出版関係書簡）を収録した。いずれも南方熊楠の伝記上の諸経緯を明らかにする上で重要なものを選んだもので、大部分は今回初めて公表されるものである。それぞれの書簡の書かれた経緯、書簡を宛てられた人々の略歴等については、巻末の書簡解題を参照されたい。

収録した書簡については、原則として著者肉筆の原手簡を解読し、若干の乾元社版『南方熊楠全集』収載のものについては、これを参照した。原手簡を入手し得なかったものについても、乾元社版全集の編集に際して作製された写しをテキストとした。書簡の配列および校訂上の諸原則は、すべて全集本巻の書簡収録の巻（第七―第九巻）と同じである。

論考補遺としては、和文は「鳥を食うて王になった話」等三篇、英文は "The Origin of the Swallow-Stone Myth" 一篇を収録した。いずれも全集本巻の該当する巻に、テキストの発見および校訂が間に合わなかったために、本書に収録せざるを得なかったものである。なお "The Origin of the Swallow-Stone Myth" は監修者岩村忍の校訂によるものであり、その解説を参照されたい。

目

次

凡例

書簡補遺

上松蓊宛書簡……3

大正三年―十五年……5

昭和二年―十六年……132

山田栄太郎宛書簡……317

山田信恵宛書簡……363

羽山芳樹宛書簡……366

雑賀貞次郎宛書簡……373

須川寛得宛書簡……404

宇井縫蔵宛書簡……411

中井秀弥宛書簡……416

多屋謙吉宛書簡……439

和中金助宛書簡……443

喜多幅武三郎宛書簡……446

田中敬忠宛書簡……450
西面欽一郎宛書簡……463
西面賢輔・松本勝宛書簡……469
西面導宛書簡……473
楠本秀男宛書簡……475
中瀬三児宛書簡……479
大江喜一郎宛書簡……482
前川正司宛書簡……487
田所四郎宛書簡……489
藤岡長和宛書簡……495
森口奈良吉宛書簡……497
西川瀁宛書簡……501
三田村玄竜宛書簡……511
宮武外骨宛書簡……544
中山太郎宛書簡……546

岡茂雄宛書簡……553
岡田桑三宛書簡……575

論考補遺

鳥を食うて王になった話……579
「孕石」の訳語について……618
本草会……619
書簡解題……621

THE ORIGIN OF THE SWALLOW-STONE MYTH……1
英文『燕石考』について……岩村　忍……23

南方熊楠全集　别卷第一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

上松蓊（しげる）宛書簡

大正三年―十五年

1

大正三年十二月九日午下

上松蓊君机下

南方熊楠再拝

拝啓。前日は華翰拝受千万難有(ありがた)く鳴謝し奉り候。小生当時『日本及日本人』と引き続き『太陽』へ新年号の初刊に出すべきものを認めおり、ために大いに後れ申し候ところ、ようやく昨朝仕舞い申し候を、昨日午後一時より今朝九時まで熟睡、只今起きたるところに御座候。右『太陽』へ出し候は、来たる卯の年に因み、去年の「虎の話」のごとく同一体裁に「兎の話」を出し候。しかるに材料すこぶるおびただしく集まりおり、到底『太陽』の十頁では尽きず。よって『太陽』へは「兎に関する民俗と伝説」のみ記して寄せ、他の半分「兎に関する童話と縁起(えんぎものがたり)譚」は全く手前に材料残りおり候。『日本及日本人』へ寄すれば必ず歓迎さるべきも、同誌へはすでに「石蒜と浜田弥兵衛の話」という長篇、元日号と十五日号と事によると二月一日分にも連載のはずで〔「石蒜の話」として大正四年元日号に掲載〕、すなわち小生の分筆頭となり、予告出でおれば、急いで出しくれても右の「兎に関する童話と縁起譚」は二月一日号より早くは出でず。然るときは多分の読者は小生が来年正月号に諸家が出した兎の話をうけ売りやきなおしたか、または新年号の『太陽』へ出した粹(すい)を集めたものと思わるべく、大いに面白からず。よって貴下何とか交渉して新年号のいずれの新聞へなり御出し下

さらずや。

小生は『読売新聞』に高木敏雄氏が毎々民俗古話のことをかきたるをおくりくれるゆえ、同新聞へ出すなら手心をよく存知おり、他の東京の新聞は一向見るに由なきゆえ、その手心を知らず。故に『読売』ならばもっとも恰好なるが、しかしその辺はどうでも宜しく、すなわちなるべく手荒きことをかかず、また下鄙たことをさしひかえればどこでも通ることとは存じ候。

右寄稿料および何月何日までに最晩のしめきりということ御聞き合わせの上御一報下され候わば、小生原稿浄写の上貴下まで差し上ぐべく候。新年には必ず諸新聞に兎のこと出すもの多かるべく、晩くなるとさしあい衝突も生ずべきに付き、なるべく早く御かけあい下されたく候。

かかること申し上ぐるは如何なれど、小生は本邦の民俗学古話学者としてもっとも海外に知られたるものに有之、また明治十八年来もっとも早くこの学に着手し海外にては斯学の大権威と仰がれおり候。このことは柳田・高木二氏が出しおる『郷土研究』、石橋臥波氏の『民俗』を読むもののみな知るところにて、近く芳賀博士より『今昔物語集』の攷証本を出せしにも小生の援助を求められ、また日本民俗学会の評議員は二条公と高木氏（学士）の外はみな博士連なるに、小生のみは無位にて撰まれ候も辞したるに候。

小生は故福沢諭吉氏の天爵説に心酔し、今に学位とか学会員と申すは一切辞退致しおり候。ロンドン大学の前総長ジキンス至って別懇にて、一年間表向き同校の聴講者と署名だけしたら博士の学位をとれると毎々すすめられしも、小生そんなことは無用と申し、ことわり申し候（明治二十七年ごろのこと）。

右は他人にいうべきことならねど、もし小生のことを聞き合わされ候わば御答え下されたく候。　早々以上

大正五年九月二十八日午後五時前

上松蓊様

南方熊楠再拝

拝呈。二十五日御状まさに拝見。小生只今多用何ともいえぬほどにて、かつ足悪きゆえ起居まことに不自由なり。それゆえ御受け後れ申し候。

先日の『大国民』とか申す雑誌の耶蘇教退治号つづきすでに出たる由、雲州の人より申し来たり候。もし今も得らるべくば御送り下されたく候。菌の画はなかなか小生方へ留め置くべき分ちょっと写し得ず。しかし冬中にはきっと写し、原本差し上ぐべく候。

前日御送り下され候褐色の墨はまことに宜しく候。ただ一つこまることは、この墨の汁まことに乾き易く、むつかしき画をかき、かれこれ考えおるうちに右の汁が一度乾くともはや水を入れても決してもとへもどらず、[illegible]かくのごとき細粒を生じ申し候。故にかの貴下へ差し上ぐる菌の絵など写すには、リスリンかなにかと混じたる水の中ですることにも致すべきやと勘考中に御座候。褐色の彩色が一番むつかしく、また右の菌の絵は主たる彩色が褐色にあるなり。とにかく少し暇が出来たら二日ばかりかけていろいろとやって見るべく候。

上田万年氏の『イソップ物語』は何分宜しく願い上げ候。新本でも旧本でも宜しく候。上田氏の訳にあらざれば入らず候。（小生はイソップの本はいろいろとりそろえ持ちおり候。）

博文館編輯課に鈴木徳太郎という人あり。この人小生の寄書の係なり。貴下何とかして書状または電話いずれにしても早く事の分かるように、小生に『太陽』来年新年号の「蛇に関する迷信と俗伝」を書かせくれぬか聞き合わし、返事下されたく候。原稿は十一月末までに出すなり。これは前方も例年の例で承知と存じ候。しかして別に「戦争に用立てた禽獣」〔「戦争に使われた動物」として掲載〕これは昨年英国リヴァープール大学のポストゲイト博士より問を募り候に小生答えたるも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com